山路愛山研究（I）

定平　元四良

1

明治文化・文学研究に，該博な知識を駆使して幾多の業績を挙げられている木村毅は，明治文学も藩閥意識に目をつぶっては核心がつかめない。もっと端的に断言するなら，明治文学はみんな幕府方の産物，朝敵の産物である。「維新の風雲に乗じて，馬上、天下を取った藩，すなわち薩長土肥およびそれに阿附してうまくバスに乗りこんだような諸藩からは作家は一人も出ていない」[1] といって，琵琶湖の真中あたりに一線を引いて，日本を東西に両断してみると，西は大たい勤王藩で，東が佐幕になる。明治文学者の過半は，この東から出ているという。露伴，紅葉，漱石，美妙，魯庵，一葉らは江戸の生れである。逍遥は美濃国の生れ，藤村は信州，樗牛は山形，晩翠は仙台，独歩は銚子等々まだいくらも挙げることができる。西側でも有名な文学者の出ているのは幕府方の藩であるといえる。鷗外の津和野藩，「ホトトギス」の子規，鳴雪，虚子，碧梧桐らは松山の産であるが，松山の初代城主は徳川家康の母ちがいの弟で，転封や断絶をしたことがない。解釈の難しいのは鉄幹だが，晶子は堺市の生れで堺市は長崎と同じ幕府の直轄港となったから幕府方の土地である。以上の様な明治文壇官賊両分観を述べている。そして，この様な見方は自分が創り出したものではなく，山路愛山の創見であるという。

木村毅が愛山の創見というのは，愛山が「現代日本教会史論」で述べている以下の見解をさしているのである。「試みに新信仰を告白したる当時の青年に就て其境遇を調査せよ。植村正久は幕人の子に非ずや。彼らは幕人の総てが受けたる戦敗者の苦痛を受けたるものなり。本多庸一は津軽人の子に非ずや。維新の時に於ける津軽の位地と其苦心とを知るものは誰れか彼れが得意ならざる境遇の人なるを疑ふものあらんや。井深梶之助は会津人の子なり。彼れは自ら国破山河在の逆境の経験したるものなり。押川方義は伊豫松山の人の子なり。松山も亦佐幕党にして今や失意の境遇に在るものなり。新信仰を告白して天下と戦ふべく決心したる青年が揃ひも揃うて時代の順潮に棹すものに非ざりしの一事は、当時の史を論ずるものゝ注目せざるべからざる所なり」[2] この愛山の見解を文学世界に応用したにすぎないのである。木村毅は「じつは少年時代，私は愛山のこの議論をよんで，眼中のウロコがかげ落ちたように感じ，明治文化の秘密を開くひとつの重要な鍵のここにあるを思うて，心のおどる思いをしたことを忘れぬ」[3] といっている。そして，愛山の全著作はもちろんのこと，書冊にならない断片までも，古雑誌で渉猟し古新聞で筆写するなどしているところをみると，愛山から可成りの影響を受けたものと考えられる。木村毅が高く評価した愛山の創見は，いうまでもなく愛山自身が幕臣の子であったことに起因している。ここで愛山の略歴を年譜的に記しておこう。

愛山・山路弥吉は元治元年（1864年）幕臣山路一郎の長男として東京浅草の天文屋敷に生まれた。明治維新の変動は山路家に決定的な打撃を与えた。父は上野の彰義隊に参加し，後に榎本武揚に荷担し函館に行き官軍と戦い，敗戦后一時行方不明となった。母は二男出生の折嬰児と共に他界した。明治2年の春，愛山，6才の時，祖父母と共に静岡へ無禄移住した。御家人生活からどん底生活に転落したのである。その困窮の様子は「懐旧録」[4] に述懐されている。明治5年，行方不明であった父が再び家族の一員となったが，失意からくる父の放縦な生活態度に愛山は悶々の年月を送ったのである。明治14年，祖父金之丞死す。明治19年頃，基督教の洗礼を受けた。明治20年，この年の2月から創刊された『国民の友』に掲載され

た蘇峰の論文に感動し，以後終生，蘇峰の最もよき知己であった。明治21年，父一郎の死を契機に祖母を伴って上京し，東洋英和学校に入学して基督教を学ぶ。明治23年祖母死す。東洋英和学校を卒え，一時，浅草教会の牧師を勤めたが，その後，約1年間静岡県袋井教会の放師を勤めた。明治24年，メソヂスト三派の『護教』が創刊され，最初の主筆として迎えられた。北村透谷と相知る。明治25年，民友社へ入社，国民新聞記者となる。明治30年，民友社を退社，毛利家編纂所に入所，防長回天史の編纂に従事，堺利彦と相知る。明治32年，信濃毎日新聞社から主筆に迎えられる。全生涯を通じて自由に活躍できた時期といわれる。明治36年1月，雑誌『独立評論』を創刊し，「帝国主義」を主張するようになった。以後，『独立評論』は休刊，再刊を繰返した。明治38年，斯波貞吉，中村太八郎等と国家社会党を結成した。また，社会主義関係の論文を発表。明治43年，『国民雑誌』を創刊，「国民」のための雑誌として多数の人々に読まれることを意図した。大正6年3月14日発病，翌15日死去，54才。

2

徳富蘇峰は「愛山山路弥吉君」のなかで，「惟ふに君が反撥的傾向，戦斗的気象，而して其の必然の結果たる自助的精神は，地に落ちてより以来，自から人事の何物たるを解せざる以前，業に己に其の根帯を，君の方寸に措きしならむ。而して是れ実に君の一生を一貫したる大動力たりし也」[5] といっている。幼年期から青年期にかけての困苦に満ちた生活が，蘇峰がいうように，愛山の思想形成の基底をなしたことは否定できないであろう。だが，単に貧乏であったことではなくして，藩閥政府によってつくりだされた，父一郎に対する一般的社会的評価—朝敵—への怨念こそが愛山の思想形成の重要な契機と考える。『現代日本教会史論』で，「総ての精神的革命は多くは時代の陰影より出づ」といわしめたのもこれである。『日本人民史』では，不心得な史家に賊名を負はせられた其子孫の不愉快は充分に推察できるという。忠君愛国の精神は時の政府方に譲らないものがある。君と国とに対する心事は公明正大で少しも後暗い所はない。それを支那流の筆法を用いて賊となすのは，事実を辨えず同胞の名誉を毀損するものだと厳しく批判している。

木村毅が柳田泉に聞いた話として幸田露伴のことをしるしている。すなわち，明治天皇崩御のあと，伝記編纂の議がおこり，その主任執筆者として幸田露伴に白羽の矢が立った。しかし，その交渉の使者に対して露伴は「命はつゝしんで奉ずべきも，こゝに一つの条件あり，身は幕臣の家にうまれ，旧主徳川家をこれまでの世間の通念にしたがい，朝敵あるいは逆賊とよび，その党与を賊徒または賊軍と称すること，堪うる所ならず。この儀いかゞにござりましようや」[6] と尋ねた。これでこの話は沙汰やみになったというのである。露伴にまつわるこの話は，愛山の怨念を理解する傍証にはなるであろう。維新以来半世紀，明治の御代が幕を閉じる時にいたっても，藩閥派の佐幕方に対抗する執念，裏返せば，佐幕方の藩閥方への怨念が生きづいていたのである。『防長回天史』の編纂に従事した愛山は，「負けた奴が勝った奴の歴史を書いているのだと筆の上で敵を取りでもしそうに笑ってゐた」[7] という。

いま一つ，愛山の思想形成にとって重要なモメントとなったのはキリスト教との出合いである。彼は明治18年夏頃から日本メソヂスト静岡教会の英語会に出席するようになり，19年頃牧師平岩愃保から洗礼を授けられた。21年6月父一郎が死去したのでその年の暮に祖母を伴って上京した。そして平岩愃保の推薦で東洋英和学校に舎監として入り，傍ら神学を修めた。23年学校を卒え，一時浅草教会の牧師を勤めた。その年6月祖母の死によって一人身となったので，静岡県袋井地方の伝道を命ぜられて約1年間袋井教会の牧師を勤めた。24年夏再び上京，メソジスト諸派連合の機関誌・週刊『護教』の主筆となり社説を担当した。『護教』創刊の目的は『現代日本教会史論』に愛山は以下のように述べている。明治20年以降入ってきた新神学に対して教会がオーソドックスな信仰を堅持しなければならないとしたことにある。しかし，二・三先輩を除けば，教会の怯懦な態度が我慢ならなかった。そこで「当時の記者は神学の智識に於て其有する所の材料甚だ称薄なりき。されど記者は信ぜり。教会にして其信条を護持す

べき理由を明白にせずんば是れ三軍向ふ所を知らざるものなり。記者は自ら神学の戦場に出づべき兵糧弾薬に乏しきものなるを知る。されば信仰の野は既に戦場となれり。一張の弓、一本の槍の持主と雖も亦出陣を辞すべからずと。彼は此の如くにして所謂正統派の為めに戦はんとせり。」[8] と当時の状況を回想している。当時の愛山の信仰を示すものに「信仰個條なかるべからず」[9] がある。「旗色分明ならずんば三軍何を以て向ふ所を知らんや」という書き出しで始まるこの短文をみると，愛山にとっては，自己の信ずる信条を明確に告白することが大切なのであって，いずれの信条を告白するかゞ重要なのではない。旧信条から新信条へ移ってもよい。一部訂正してもよい。「之を置くの可否を論ずるに至りては事理を解せざるの太甚しき者也。」つまり，さきに正統派信仰を護持するために戦ったのは，旗色分明にしなければ精神界の運動ができないからであり，キリスト教の精神を社会に実現することが目下の急務である。この時にあたって，徒らに神学や哲学や理想を理論のレベルで語るに止まっている時ではないと信じていた。「若し我が講壇をして単に教師が其理想，其議論を語るの所たるに止まらしめば，教会は空論の教会となり，而して信徒は空論の人となるべき也。吾人の必ず記すべきことは，吾人は理想の中に活くる者に非ず，実地の世界に立つ者なることなり。」従って、改悔，救拯，信仰復活の如きはすべて神学的想考の問題ではなくて経験的なものである。牧師は会員にキリスト教徒たるべき実践的な教育を与えるべきで，教義を教えることは第二，第三の問題である。回教徒の軍国が天下無敵であったのは，彼等が人は天命に非ずんば死ぬものではないという確固たる信条を信じていたがゆえである。文明の進んだギリシヤが比較的野蛮なローマ人に亡ぼされたのは，ギリシヤ人は懐疑的でありローマ人が確固たる信条を持っていたがゆえである。「吾人は重ねて言はんとす，吾人の所謂信條とは，此に因りて生き，此に因りて死すべきものなり。即ち吾人の血を以って印すべきものなり。文字に書きたる信條の謂に非る也。」以上が「信仰箇條なかるべからず」に示された愛山のキリスト教信仰である。佐幕派の子としての愛山は，精神的革命の戦士たることにおいて自己の存在理由を見出さうとした。そして，聖書の中のイエスの生きざまにその生きた手本をみたのである。

愛山の信仰を「海老名弾正氏の耶蘇基督伝を読む」[10] によって今少しみてみよう。「宗教は人間に安心立命を与えるものである。」というのが愛山の宗教観である。そして，古今の宗教的天才は，みな自分は人民によって養わるべきであると信じていた。人民の手によって養われるべく心に決して，つまり無所有によって始めて人民に安心立命を語りかけることができるのである。釈迦も基督もそうであった。つぎに，愛山は外国伝道会社から教会の独立を説いた。キリスト教が日本の精神的革命に寄与するために不可欠の条件とした。外国伝道会社と宣教師とが日本におけるキリスト教の成長を妨げていると主張した。この点は内村鑑三と共通するところがある。更に他人の立場を批評するためには—安心立命を語り得る説教者は内村鑑三，松村介石，海老名弾正の三名である—まず自己の所信を告白しなければならないとして，自己の信仰の立場を表明した。「余輩は総ての宗教に対して多大の尊敬を払ふものなり。殊に基督教の根本教義たる＜神の父たること＞，＜人類の兄弟たること＞の二原理に至っては余輩の謹んで疑ふべからざる真理として愛用せんとする所なり。然れども余輩は之と共に世の所謂正統教理に対しては無頓着なる者たることを告白せざるを得ず。」と述べて，以下歴史家としての彼の本領を発揮し，例えば，山上の垂訓も諸々の他宗教の教典に発見し得るものであること。キリストの誕生や復活など宗教的天才につきものでキリストのみのものではないこと。四福音書の記事は福音書記者の宗教的信仰及び其のキリストに対する見解を表示する以外は価値のないこと。「余輩の信ずる所に依ればキリスト教の中心的生命は唯だ二大教理と，此の教理を体認して聖き生涯を愛したるキリストあるのみ。其他は則ち論ずるに足らざるなり。」しかもこのような信仰を持つにいたったのは，聖書の中で自分の心に適い我が身に益があると考えられる粋を抽出して，わが宗教とよぶべきものを得たのである。安心立命を得たのである。人が自分をキリスト教徒とよぶか否かは意にかいするところではない。以上が愛山の信仰告白であ

る。

正統派教理を新神学から擁護するために創刊された『護教』の主筆になった愛山は，新神学に影響されて正統派教理を放棄したのであろうか。信仰に変化をみたのであろうか。そうではなくして，彼にとって重要であったのは，正統派教理を固執するにしろ新神学の信仰を表明するにしろ，明確に自己の信ずるところを宣言する態度そのものであった。愛山の文章には，一種の光彩と気魄が具わっていることを認めながら，基督教の伝道と心身を一つにせず，その職掌より己む得ず書くという姿勢から，『護教』における愛山の地位はアブノーマルであるといった植村正久の批判[11]は，愛山の信仰の本質を鋭く見抜いていたと考える。愛山の信仰を語るに重要と考えられる『現代日本教会史論』について，殆んどふれなかったのは，すでに秀れた研究[12]があることにもよるが，そこでは，史論家としての愛山がキリスト教を語っているのであり，キリスト者愛山の信仰告白は，上記の二つの短文により鮮明に語られていると考えるからである。木下尚江は，愛山の信仰と思想とは始終儒教を離れないといっている。幕臣の子として，儒教的教養を基盤として培養されたキリスト教信仰が愛山を支えていたと考える。

3

愛山の著作活動は『愛山文集』の「凡例」によると，第一期が明治23年より30年に至る期間で，『護教』『国民之友』『国民新聞』によって，キリスト教と史学の造詣を深めた時期。第二期は明治31年から35年の期間で，『信濃毎日新聞』の主筆として時事評論および地方の青年男女を啓発した時代，したがってこの期間の文章は立志修養に関するものが多い。第三期は明治36年より40年に至る期間で，雑誌『独立評論』を創刊し，帝国主義を唱え，日露戦争を主張し国民の愛国心を鼓舞し，国家社会主義を唱えるに至った時期である。第四期は明治41年から大正元年に至る時期で，『国民雑誌』の主筆たりし時代。第五期は大正2年に始まり大正6年3月の愛山が死去するまでの期間で，『独立評論』を再興して盛んに論陣を張った時期である。この間に『日本人民史』の執筆にかかったが未完に了る。以上のように分けられているが，ここでは，「英雄論」「帝国主義論」「国家社会主義論」「日本人民史」をとりあげて愛山の抱懐する思想を明らかにしよう。

愛山の本領が史論であることは明かである。その史論は平民主義と英雄主義との二本柱によって展開されている。「英雄論」は一つの柱である英雄主義の考え方を述べたものである。「英雄論」は明治24年1月の『女学雑誌』に掲載されて好評を博し，『護教』の主筆となる契機をなしたものである。以下その内容を述べる。明治維新以来日本の文明は世界を驚殺する程開化を遂げてきた。この開化の過程では種々なる議論が展開された。たとえば，国会開設に対しては時期尚早論，教育に対しては四書五経の復活，君主専制賛美論等々。しかし，開化の大勢はこれを制止することはできなかった。今や宛然として，政羅巴ナイズされんとせり。勿論輓近我人心が少しく内に向い，国粋保存の説が歓迎せらるるの現象は見ゆれど，それは模倣時代から批評時代えと前進した証拠であろう。過去のことをとやかく云っても益なきことで，これからの「我文明を如何にすべき」かが重要な問題なのである。

我文明開化は，欧米人をして後へに瞠若たらしむる程の進歩に相違ない。しかし，それは物質的文明の側面だけであり，物質的人間のみが生み出された。外形的欧化を模倣する紳士淑女のみが闊歩するようになった。人心は其外界の進歩に殆ど反比例して，其樸茂，忠愛，天真の如き品格を消磨してしまって，唯物質的快楽を満足さすことに汲々としている。一国の興亡は国民の精神の在所にある。「余は信ず，今日に於て我文明をして有効のものならしめ，活気あるものたらしめ，永続するものたらしめんとせば，現時の行掛りなる物質的開化の建造と共に，更に高尚なる精神的開化の建造に我歩武を向けざるべからず」[13]，高邁なる精神を持った人物の養成こそ目下の急務である。現況は政界も宗教界をみても，風に吹かるる芦の如き人物を以て充されんとしている。

しからば如何にして人物を造り出すべきか。(1)19世紀の董仲舒を学んで法律制度を以て人心の改造をしようとするものがいるかもしれない，これは定型的な人間をつくるだけである。(2)学校教育

によって人心一新をはかるのは第一の方法よりは賢明であるが，学校教育は尋常一様の士を作るには足りなん，奇傑の士は此より述を絶つべし。しかして次に述べる方法こそが精神的革命を実行するにふさわしい人材を養成することになる。愛山はいう(3)「吾人只一策あり，是れ天然の法則なり。是れ歴史上の事実なり，何ぞや，英雄を以て英雄を作るに在るのみ。」[14]一人の大英雄好模範が更に他の幾多の英雄を生み，革命を催し，国の元気を恢復し，地の塩となり，世の光となるであろう。故に今日に及んで我文明の進路を一転すべきの策，唯国民をして其の理想人たるに適ふべき最大純高の英雄を仰がしめて以て国民の品格の高くするに在る耳。そして，その大英雄は教訓を述べるだけではなく行為に於て模範となり，国民に進路を表示するものでなければならない。万世に師範たるべきものを世界の中に求めなければならない。その人の名はイエス・キリストである。「吾人は爰に確乎たる信用を以てイエス・キリストの人品は信に世界の師範として仰ぐに足るべきものなることを敢言せんとす。」[15]。我日本の精神的改革を図る者は目をここに注がなれけばならない。しかしながら，世の所謂神学なるもの，教会の礼式なるものが基督の品格を蔽はんことを恐れる。われわれはそれらに惑わされることなく直接に基督の品格を研究しなければならない。今日の日本は独立の思想をもたない揚柳的人物は不要である。信仰あり，心に平和があり，独自の思想をもつ男子漢が必要である。「十年以前迄は我サムライ族は実に英国中等民族の如く世界眼ある者の畏るゝ所たりし。而して今や彼等は消し去らんとす。」[16]る時にあたって，クリスチャンたる者は深く自ら敬して精神的文明の砥地たらなければならない。クリスチャンは現代のサムライ族である。時代の陰より出て精神的革命を担うサムライ族である。愛山もこのサムライ族の一人であらんことを期した。

彼は多くの人物論を著わした。『時代代表日本英雄伝』によって歴史を語ろうとした。これは単に英雄個人の偉大さを表彰しようとしたのではなく，平民によって生かされた英雄を語ることによって，時代を語り，ヴイヴイドな歴史を描こうとしたのである。

4

愛山は年来の念願を実行にうつすために，明治36年1月，個人雑誌『独立評論』を創刊した。その第一号に「余は何故に帝国主義の信者たる乎」，第二，三号に「余が所謂帝国主義」を書いた。これによって愛山の思想的立場を明瞭に知ることができる。愛山は『独立評論』の出版準備のために35年11月から12月にかけて上京した。そして内村鑑三と旧交を温めた。当時の内村は，周知の如く，日清戦争の時に義戦論を唱えたことに心の痛みをおぼえ，絶対的非戦論者になっていた時期であった。そこで内村が「愛山君よ君は近来帝国主義の信者となれりと聞く，帝国主義は余が基督教の大敵として排斥する所なり，君以て如何となす」と問うたことに対する解答として書いたのが「余は何故帝国主義の信者たる乎」である。つまり愛山は『信濃毎日新聞』の主筆としての論説や講演などによって，帝国主義論を書く以前から帝国主義者とみられていたことになり，またそのことを示すものとして，いくつかの論文が指摘されている。それらは割愛して前記の二つの論文から愛山の帝国主義論をみてみよう。

先づ宗教的立場を明かにすることから説いている。総ての宗教に対し十分なる敬意を表す。しかし，宗教に対する偏僻な我見を排斥する。是れ真理なるが故に此の外真理なしと固執することはいけない。キリスト教は真理なりというのはよいが，キリスト教以外に真理なしと固執するのはよくない。真理を追求する心は常に純乎たる自由な精神を持っていければならない。されば何物にも束縛されない自由な心で，帝国主義の信者であることを告白する。而してその信ずるところが若し宗教の信条と矛盾すれば，いずれかに誤謬があるからであり，矛盾に調和の余地があれば調和し，なければ真理と信ずるところに従うのみである。そこで，何故に帝国主義の信者になったかといえば，人間は存在する権利があるという信念の上に立つ。故に帝国主義の信者となった。「人を殺すこと勿れとは宗教の余に教えたる真理なり。然らば則ち余が世界に向って吾を殺す勿れ，言を換へて之を曰へば余は存在するの権利ありと要求する

は何ぞ宗教と矛盾する者ならんや。余は固より自己を犠牲として真理の為めに献ぐべきことを宗教に依りて教へられたり。さりながら余は他人の不正当なる要求に此身を捧げよてふ奴隷主義を教へられざるなり。」[17] 釈迦も基督も無益の犠牲を吾人に要求していない。人に存在する権利があって所謂人道というものが存在する。

それでは，人間は存在する権利ありとの信念からどうして帝国主義を信奉するようになったのか。他なし帝国主義に非れば人は地上に存在し得べからざればなり。人は単独者としては存在し得ない，なんらかの社会組織（複数的存在）の中でのみ存在し得る。帝国主義は現代に最も適したる社会組織を求むるものである。所謂帝国主義とは此人類に固有なる社会性に従ひ現時に適応すべき社会を為さんとするもののみ「昔しの宗教家が王と権威あるものを敬ふべしと稱へたるは社会組織が人性に基きたる毀つべからざる事実なるを認めたればなり。現時の宗教家のみ，独り此本性に基きたる帝国主義を排斥せんとするは何ぞや。余の解するに苦しむ所なり。」[18]

また帝国主義を以て侵掠主義なるが故に排斥すべしと曰う者があるが，健康な労働者が不健康な労働者を工場より駆逐し，正直な商人が不正直な商人を市場より排斥し，勤勉な農夫が懶惰な農夫を放逐するのは適者生存であり自然淘汰である。宗教的にいえば天の審判であり因果応報である。侵略主義の名を恐れて不健康なもの，不正直なもの，懶惰な者の失敗を庇護する理由はない。国民が健全に事業活動をし得るような社会的組織に依って世界に向って公道を要求するのが帝国主義の理想である。若し夫れ之を侵掠主義と曰ふべくんば余は侵掠主義の名を悪むものに非ず。

以上の愛山の主張を読んだ内村は，蘇峰氏一輩と共に君子豹変の実例を示した勇気を多とすると云った。それに対し反論したのが「余が所謂帝国主義」である。愛山は云う。帝国主義の信者となったが為めに自由を愛し，進歩を愛し，光明を愛する信仰を捨てたのではない。個人の自由を敬うがゆえに国家の自由を敬う。何故なれば，個人の自由を保護する唯一の機関は国家である。したがって国家が他国から自由でなかったら其機関の正当な運用はできない。個人の自由真に愛すべし。しかも国家がその存在を問わるる日は，個人の自由は国家に献げて国家の存在の安全をはからなければならない。「今や世界の運命は急転直下して国家の存在は昔より切要なる問題となれり。余たるもの何ぞ時勢の変化と共に其論歩を一転せざることを得んや。」[19] 世界の進展は国民的運動の時期より帝国的運動の時期に入っている。帝国的運動とは如何なることを指すのであろうか。

(1)経済学の見地より言へば国家は最も大なる資本を有する最も大なる合資会社なり。これは今日の世界の大勢が生み出した新主義である。人民の権利を内外の侵犯から防衛する機関は国家だけである。また人民が有する共同資本の最大の運用能力を有するも国家のみである。いまだ交通機関の未発達の間は国家的営業は不可能であったが，科学技術の進歩にともなって今や時勢は一変した。「欧州大陸の人民は今や其国家を見るに一種の合資会社を以てし，国利民福に向って其の勢力を応用せんことを望むに至れり，而して此の如き傾向は更に他の事情に依りて益す切迫するに至れり。他なし，大富豪の現出是なり」[20] 大富豪の現出によって民政の基礎を動揺せしめられている。富豪という新大名の専横を防ぐためには，国家の有効な活動をまつしかない。国民的運動時代は既に過去のものとなり帝国的運動の時代に入った。余は其の可否を論ずるものに非ず。世論の歩みは議論の善く左右し得べきに非ず。余は大勢と戦ふの愚なるを知る。したがって，日本国民が大勢に順応して自己の制度慣習を変えることを望む。

(2)領域の大なるを有利とするは現代の傾向なり。昔は国家の大なるは却て其衰弱を来たすべき原因なりと嫌われたが，今や科学の進歩は大帝国を作るのを容易にしている。世界の強国が好んで其領域を増加せんと勉むるに至りたるは怪しむにたりない。ひるがえって，資本家と労働者との関係を考えてみるに，労働者が資本家に対抗するためには，同じだけの威力をもたなければならない。労働者と資本家との間に存するこのような態度は今や国と国との間にも行わるべきものとなった。ある国が自国の産業を奨励し，他国の物品を排斥し，一国の生産を以て一国の生命を継ぐ決意し，此の如き政策によりて立たんとする時，他の一国が一視同仁の主義により，関税の障壁を除

き，自由に物品を迎えんとするは殆んど不可能なことである。今の所謂帝国主義の勃興は決して偶然の現象ではない。今日は武装的平和の時代である。国家の領域の開拓を虚栄視せんとるものは，自己の棲息する世界に対して知識のないものである。世の有情の君子，博愛の君子は多くは帝国主義の名を悪む。けれど，大勢は冷酷なり。孟子あるが為に七国は干戈を休めず，トルストイあるが為に世界は其武装を解かず。日本国民だけどうして武装を解くことができようか。この時にあたり大いに国民の覇心を鼓舞する必要を感ずる。

(3)種族的観念の発達である。人類の種族的観念は，第一期は他種族を観念的に軽蔑した時期，第二期は他種族との相互理解が発達し四海同胞主義が生まれた時期。現在は第三期で，自己の存在確立を基礎として他種族を排斥する時期に至っている。各人種は自己の同族を団結し，其力に依って世界に於ける自己の生存を主張することを神聖なる義務と感じているようである。「人類の生存競争が科学の進歩の為に極めて劇しき状態である。そのために，国家営業論の復興となり，領域開拓論となり，種族団結論となり，更に一転して人口充実論となる。」[21] これは自然の勢である。今や列強の命脈は人口の充実如何にある。これが天下の大勢である。日本の国民は勇猛心を奮起してこの大勢を利用し勝者にならなければならない。列強の国家的営業に対抗し，軍備を充実して侵掠に備え，併せて武装的平和の世界に於ける発言権を維持し，人口の増加を促し，進撃的態度をとらねばならぬ。今や世界は帝国的威力を以て我日本を圧迫せんとしている。我々にとっては，これはむしろ我々の力を試し，境遇に対する活力を試錬すべき時である。日本の将来を大ならしむるチャンスである，と愛山はいう。

5

「眠れる獅子」を倒した日清戦争の勝利は，明治日本の国際的威信を高めて，世界の桧舞台に登場せしめた。多年の懸案であった条約改正もやがて達成することができたし，日英同盟を締結することにもなった。しかしながら，他方「世界の中の日本」「極東の大国」日本の自負は，三国干渉によってみじんに打ち砕かれた。まだまだそれに相応しい実力のないことを，力弱きものの悲哀を痛感せしめられた。このことは，維新以来抱きつづけた富国強兵の目標に勇往邁進することを肝に銘じせしめた。強兵の条件は富国であり，富国の条件は資本主義の発展であった。「日清戦争は未だ資本家が自己の利益を計らんが為に起されたものと言ふ能はざる」[22] 発展段階にあった日本の資本主義は，総額2億3150万両の賠償金を潤滑油として，「臥薪嘗胆」のスローガンを掲げ，戦後経営にあたった。国際的地位の向上と三国干渉による挫折，そして資本主義体制の確立という明治30年代の政治的社会的状況は，思想界に「帝国主義の流行」と「社会主義の流行」とを喚び起した。「社会主義の流行」については，愛山の「国家社会主義」を述べるときにふれることにして，ここでは，「帝国主義の流行」について述べよう。

この時期は，世界史的には先進資本主義諸国家の世界分割斗争が，植民地化の最後に残された地域である極東へ集中してきた時期である。中国を舞台とした英，仏，独，露，米の斗争は熾烈であった。このような極東の危機的状況に対応しつつ，世界の小国日本が極東の大国として，さまざまな矛盾ををはらみながらも世界帝国主義体制の一環として，みずからの政治体制を確立しようとする時代であった。このような政治的社会的状況のなかに，膨脹主義的側面を代表する帝国主義イデオローグとして登場してきたのが，高山樗牛の「日本主義」であり，「大日本膨脹論」の徳富蘇峰であり，「優勝劣敗」「適者生存」の山路愛山であった。

樗牛や蘇峰の国家主義は，明治20年代の国粋保存主義の単なる延長線上ではなく，その否定的提言を含むものとされる。ただ20年代の国粋保存主義に対する樗牛の評価など全面的に肯定され得るものかどうかは，検討する必要がある。樗牛の思想の展開は，第一期（明治27—30）浪漫主義，第二期（30—33）日本主義，第三期（34—35）個人主義に分られる。樗牛の日本主義は，明治30年6月発行の雑誌『太陽』に「日本主義を賛す」として掲載された。以後，「日本主義と哲学」「日本主義に対する世評を慨す」「世界主義と国家主義」「国粋保存主義」などの諸論稿を発表し，日

本主義時代と呼ばれることになった。樗牛の日本主義は，日清戦争後の日本の精神的危機への提言であった。それでは，樗牛の日本主義とは「国民的特性に本ける自主独立の精神に據りて建国当初を抱負を発揮せむことを目的とする所の道徳的原理」[23]である。国家の発達は国民の自覚に基かなければならない。国民の自覚は国民的特性の客観的認識から生起する。国民的特性は歴史的比較的考察が必要である。建国以来中期頃より外来文化を過重し，国民的性情を蔑視したので建国当初の精神が充分に発展しなかった。そこで「吾等は我日本主義により現今我邦に於ける一切の宗教を排撃するものなり」[24]。由来，我国民は宗教的民族ではない。所詮仏教は国民的性情の中に根拠をもつものではない。基督教もまた然り。国民的性情に一致しないものは，その完全な発達を望むべくもない。「国家は人類発達の必然の形式なり。国家的道徳を外にして別に人類的情誼なるもの之れ有らざるなり」[25]若しも今日及将来の我邦の道徳を，仏陀教や基督教にゆだねるならば甚だ危険である。とすれば，何を以て之に代えるべきか。日本主義がこれである。日本主義の目的網領は，(1)国祖を崇拝して常に建国の抱負を奉体する。(2)光明を旨とし，生々を尚ぶ。(3)武備を懈らず，国民的団結を強固にする。(4)世界平和の維持に務め，人類的情誼の発達を期す。斯の如き日本主義は，宗教にあらず，哲学にあらず，国民的実行道徳である。以上の樗牛の日本主義は，たんに国粋の保存にとどまることなく，膨脹的国民の自覚にもとづく思想である。愛山の帝国主義思想とのかかわりからいうならば，樗牛の日本主義は形而上的であり愛山の帝国主義は形而下的である。日本主義のみならず，樗牛のもろもろの論説は，愛山の目にふれていたであろうが，キリスト者愛山には反キリスト者樗牛の思想的影響の痕跡を認めることはできない。

影響ありとせば，徳富蘇峰の『大日本膨脹論』であろう。蘇峰と愛山との関係から充分考えられるところである。蘇峰のこの小冊子は，幾多論文をまとめたものであるが，最初の論文（27年6月『国民之友』掲載）に全体の要旨が述べられているという。序論に，著者は，日本国民の膨脹すべき必然の大勢，膨脹を沮渇する敵に打勝つこと，膨脹とは何か。膨脹すべき方法などついて述べるという。必然の大勢とは，人口の増加に比例する新版図の増加をみなければならないことである。膨脹を沮渇する敵とは，支那人種である。白皙人種は大敵ではない。「膨脹の衝突史固より可なり。願くは日勝清敗の衝突史たらしめよ」[26]清国との開戦は，膨脹的日本が膨脹的活動をする好機である。膨脹とは何かといえば，「他の膨脹的各国民と対等の地位を占め，世界の大競場に於て，角逐するを得る也。」[27]斯様に先進資本主業諸国に肩を並べんとしたことは，低い日本の評価に対する不満である。英国公使パークスは日本を南米共和国とよんだこと，香港大守ヘンネッシーは日本を埃及，土耳其に比したこと，グラント将軍は半独立国家視したことなどをあげている。さらに，海外への日本の紹介が，「富士山，ゲイシャガール」的であること。このような日本観を払拭するために日清戦争は絶好の機会である。世界における日本の位地を決める好機である。膨脹すべき方法は，「故に吾人は世界に於ける膨脹的日本を建設する為めに戦ふのみならず，亦た膨脹的日本を建設するの自信力の為めに戦ふものなるを自覚せざる可らず。決戦せよ，大決戦せよ。国力を挙げて決戦せよ」[28]以上のような膨脹論を述べたが，これに対し，社会主義の立場から膨脹的帝国主義を批判した幸徳秋水の「帝国主義」が出された。

幸徳秋水の記者生活は，明治26年23才の時，自由党の機関紙自由新聞の翻訳記者として出発し，広島新聞を経て，28年中央新聞に入社した。この時，論説も書いたが翻訳記者であった。そして31年万朝報に入社したのである。この比較的長い翻訳記者生活をとおして，先進資本主義諸国家の帝国主義的侵略と，労働運動や社会主義等の情況を熟知することができたと考えられる。そして，日清戦争後の政治的社会的情況を鑑みるとき，『廿世紀之怪物帝国主義』を書かざるを得なかったのである。

秋水の『帝国主義』は，第一章緒言，第二章愛国心を論ず，第三章軍国主義を論ず，第四章帝国主義を論ず，第五章結論の構成になっている。以下その内容を述べよう。およそ国家経営の目的は，社会の進歩であり人類全体の福利にある。社会の進歩のために科学的知識が必要であり，人類

の福利のためには文明的道徳がなければならない。自由と正義のもとに，博愛と平等の社会を実現するのが国家経営の目的である。「然れども若し不幸にして，帝国主義の勃興流行する所以の者は，科学的知識に非ずして迷信也，文明的道徳に非ずして狂熱也，自由，正義，博愛，平等に非ずして，圧制，邪曲，頑陋，争斗なりしとせよ」[29] 世界をあげて帝国主義的歩武を進めるとき，20世紀の天地が無限の地獄に堕することを憂慮した秋水は，帝国主義批判をうたいあげたのである。

帝国主義者は，深く国家を愛し「我国民を膨脹せよ，大帝国を建設せよ，我国威を発揚せよ，我国旗をして光栄あらしめよ」[30] と叫ぶ。そして，帝国主義は軍事力若しくば軍事力を後楯として外交を営んでいる。「帝国主義は所謂愛国心を経となし，所謂軍国主義を緯となして，以て織り成せるの政策」[31] である。したがって，帝国主義の是非を論ずるためには，愛国心と軍国主義の検討からはじめなければならない。

愛国心は醇乎たる惻隠の心ではない。愛国心の愛するのは自由に限られているからである。また，愛国心は故郷を愛する心に似ており，故郷を愛する心は貴ぶ可しというけれど，愛郷心は他郷を憎悪する裏返しにすぎない。昔しギリシヤの奴隷は敵国敵人を憎悪し討伐することを，無上の名誉，光栄と信じた。つまり，所謂愛国心は外国外人の討伐をもって栄誉とする好戦の心であり，好戦の心は動物的天性であり，この動物的天性は好戦的愛国心である。この動物的天性の競争場裡に19世紀は経過し20世紀に入らんとしている。日本人の愛国心は日清戦争にいたって，曾てない昂揚をみせている。清人を侮蔑し嫉視し憎悪する様は甚しいものである。したがって，「我は断じて古今東西の愛国主義，唯た敵人を憎悪し討伐するの時に於てのみ発揚する所の愛国心を賛美すること能はざるが故に，亦た日本人民の愛国心を排せざる能はず」[32] と。封建時代の武士が，国家を以て武士の国家と考えた如く，今の軍人も亦国家を以て，皇上及び軍人の国家と考えている。したがって，彼等が国家を愛すといっても，その眼中に軍人以外の国民があるであろうか，彼等の愛国心の発揚は敵人に対して憎悪を加えるも，同胞に対して愛情を加えるものではない。愛国心とは「野獣的天性也，迷信也，狂熱也，虚誇也，好戦の心」[33] 也である。この卑しむべき愛国心が，軍国主義となり，帝国主義となって全世界に流行しているのである。

列国が軍備を拡張するのは，自国を防禦するためではない。「一種の狂熱のみ，虚誇の心のみ，好戦的愛国心のみ」[34] 軍人や資本家がその野心を逞しくすることができるのは，多数人民の虚誇的好戦的愛国心が発露されたときである。われは平和を希うも，かれは侵攻の非望を有するを如何せんと。世界平和は夢悪である。また，紀綱の弛廃の甚しい時にあたって軍隊教育が如何に社会的に有効かを説く者もいる。しかし，秋水は古今東西の軍事的出来事を例証しながら，軍事専門家の所説を否定し，軍国主義は，決して社会の改善と文明の進歩に寄与しないこと，戦斗の習熟と軍人的生活は決して政治的社会的に人の智徳を増進し得るものでないといった。

故に，愛国心と軍国主義がその狂熱の度を加えると，領土拡張の政策が全盛を極めることになる。「所謂帝国主義とは，即ち大帝国の建設を意味する。大帝国の建設は直ちに領属版図の大拡張を意味する」[35] のである。帝国主義者はいう。古の帝国主義は個人的帝国主義であったが，今の帝国主義は国民的帝国主義である。したがって古の非義と害悪とで今を律すべからずと。ここで，秋水は日清戦争後の社会的現実を見据えて批判する。「今の帝国主義は国民の膨脹なる乎，是れ少数政治家軍人の功名心の膨脹に非ざる乎。是れ少数資本家，少数投機師の利慾の膨脹に非ざる乎。見よ，彼等が所謂『国民の膨脹』せる一面に於ては其国民の多数が生活の戦斗は日に激甚に赴けるに非ずや，貧富は益す懸隔しつゝあるに非ずや」[36] と。そして，英，独，米等の切取強盗の所行について批判する。帝国主義者が植民地獲得を必要とする第一の論拠は移民であるが，移民は，獲得した植民地ではない地域に流出している。帝国主義と名づくる領土拡張政策が，移民の必要より起ったとなすのは大なる謬見である。第二に，領土の拡張は新市場を必要とするからであるという。資本の饒多と生産の過剰に苦しむから。一面に於ては下層人民は衣食の足らざるを訴えている。生産の過剰なるは，多数人民に購買力がないからであ

り，その理由は富の分配が公平をかいでいるからである。分配の公平を得しむるには，現在の自由競争制度を根本的に改造して，社会主義的制度を確立することである。

以上の如くみてくると，帝国主義とは「卑しむべき愛国心を行るに，悪むべき軍国主義を以てするの一政策に命するの名のみ」[37]。植民地の獲得は必要ではなくして欲望であり，福利ではなくて災害である。国民的膨張ではなくて少数人の功名野心の膨張である。貿易ではなくして投機であり，生産に非ずして強奪である。文明の扶植ではなくて他の文明の壊滅である。是れを文明社会の目的といえるであろうか。国家経営の本旨といえるであろうか。国民の尊栄幸福は，領土の偉大ではなくて，其道徳の程度の高きに在り，武力の強盛にはなくて，理想の高尚なるにある。しかして日本の現況はどうであろうか。今の日本は帝国主義に熱狂している。陸軍，海軍の拡張，台湾の領有，北清事変へ軍隊派遣，国威は昂揚した。軍人の胸間には幾多の勲章が装飾された。議会は之を賛美し，文士は文を謳歌した。だが，是れらがどれだけわが国民を大にし，どれだけの福利を与えたか。財政は紊乱し，風俗は頽廃し，罪悪は日に増加し，しかも社会改革の説は嘲罵を以て迎えられる。これが日本における帝国主義の功果である。かくみてくると，帝国主義は，少数の欲望のために多数の福利を奪うものであり，人類の自由平等を殲滅し，社会の正義道徳を戕賊し，文明を破壊するものである。されば，社会改革の健児として国家の良医を以て任ずる志士義人は，宜しく大いに奪起し，20世紀の文明を帝国主義の破壊から守らなければならない。

秋水の『帝国主義』は，世界史的にみれば，イギリスのロブソンの『帝国主義』より一年早く，ロシアのレーニンの『帝国主義論』より15年早く現われている。秋水のそれが史的唯物論の理解も不充分であり，資本主義的発展の特定の段階としての帝国主義を理解するまでにいたっていないことが批判されるとしても，そのするどい政治批判，文明批評の価値は少しもそこなわれるものではない。また，帝国主義的ペストの駆除を志士義人に託したことも，当時の日本労働者階級の成熟度からみれば，寛恕していいだろう。臥薪嘗胆の声の下に，征露に向けて軍備拡張を推進していた時期に，反戦の書『帝国主義』を書いたことは高く評価していいだろう。

この秋水の『帝国主義』は愛山も読んだだろう。愛山の「帝国主義」は，内村鑑三への回答のとして書かれた。その内村鑑三は秋水『帝国主義』に序文を書いている。愛山の膨脹主義的帝国主義は，秋水の，反戦的帝国主義を批判したものと考えていいだろう。（つづく）

註

1）木村毅「新文学の霧笛」16頁
2）山路愛山「基督教評論・日本人民史」岩波文庫 25頁
3）木村毅「新文学の霧笛」22頁
4）山路愛山集」明治文学全集35筑摩書房 407頁
5）「愛山文集」3頁
6）木村毅「新文学の霧笛」13頁
7）別所梅之助「生きんとする意志」201頁
8）山路愛山前出 93頁
9）「愛山文集」31頁
10）「愛山文集」484頁
11）「植村正久と其の時代」3巻 415頁
12）今中寛司「山路愛山の思想とキリスト教」
13）「愛山文集」5頁
14）同上 6頁
15）〃 8頁
16）〃 9頁
17）〃 464頁
18）〃 465頁
19）〃 468頁
20）〃 472頁
21）〃 482頁
22）石川旭山編「日本社会主義史「青木文庫 52頁
23）明治文学全集40巻筑摩書房 23頁
24）同上 23頁
25）〃 25頁
26）〃 34巻 249頁
27）〃 250頁
28）〃 254頁
29）幸徳秋水「帝国主義」岩波文庫 16頁
30）同上 17頁
31）〃 17頁
32）〃 34頁
33）〃 39頁
34）〃 41頁
35）〃 67頁
36）〃 70頁
37）〃 87頁